

文学作品の構造と生徒の「成熟過程」

——「くるみ割り」をめぐる——

愛知教育大学 国語教室 佐藤 洋一
(昭和62年12月25日受理)

はじめに

本稿は、文学的文章指導の目標と方法について考察する一つのステップとして、児童生徒の「成熟過程」や受容能力のレベルが、文学作品の構造や表現・特性等とどのようにかわるのかについて論ずるものである。

具体的な文学作品の例として、ここではかつて中学二年生の教科書教材として用いられていた永井龍男の短編小説「くるみ割り」をとりあげる。中学生・高校生の「成熟過程」について、国語科教育の観点からみた時の特質についての分析、「くるみ割り」という小説の構造や表現の本質についての考察、そして、生徒はこの小説のどこをどのように読み、何を学んでゆくのかという点等について、主に高校一年生の「読み」の実際をあげながら、次の順序で論ずるものである。

- 一、先行研究(実践)の中から
- 二、「くるみ割り」の構造と分析
 - (1)少年の変容と父の「イメージ」
 - (2)文体のリズム
- 三、高校生の「読み」の実際と考察
おわりに

尚、全体の構想としては、文学教育の問題点、生徒の思考と成熟過程、「くるみ割り」と高校生、「人格形成小説」と心理描写、永井龍男の表現の特色等についての考察が、本稿の前提となっている。

これ等については、別稿として論じたので、あわせて参照いただければ幸いである(「人格形成小説」の一考察——生徒の成熟過程を中心に——『愛知教育大学・国語国文学報(第46集)』愛知教育大学国語国文学研究室発行・1988年3月)。

一、先行研究(実践)の中から

従来、「くるみ割り」の指導ではどこが、どのように問題になっていたのか、どのようなねらいによる学習指導が行なわれていたのか等について教科書での扱いも含めて述べる。

「胡桃^{くるみ}割り」は1946(昭和23)年7月、少年雑誌『学生』(第32巻7号)に発表された(詳しくは、別稿の「四、永井龍男の表現」を参照)。教科書に採られていたのは、1978年から1983年の間、中学二年「中等新国語二」「国語二」(ともに光村図書)である。教科書の中での位置を单元名や他教材との関係からみると、例えば、1980年2月発行「中等新国語二」では、次のようになっている。(「胡桃割り」は初出名)

四、文学に親しむ — 読んで感想を深める
「くるみ割り」

文学との出会い — 読書のために

前後に **表現1** 生活と感想・ **表現3** 読書感想という項目があり、「サーカスの馬」(安岡章太郎)が「二、文学の表現」の单元に置かれている。

1981年2月発行の「国語二」では、

三、文学の表現 — 情景や人物の描写に注意して読み味わう —

「くるみ割り」

「買い物」

「買い物」(長谷川四郎)が副教材として位置づけられ、前後に **表現1** 生活を見直す — 事実をふまえて — ・ **表現2** 楽しい読書報告を — まとめ方を工夫して — の項目がある。

1984年2月発行の「国語二」では、「くるみ割り」は採られていないが、「三、文学の表現」の单元で「幸福(安岡章太郎)」の副教材として「マッチ」(永井龍男、1951年4月21日「夕刊朝日

新聞」)が置かれている。

読書指導へのきっかけ、すぐれた文学的表現を味わうこと、表現(作文)によって現実認識を深めさせる……、指導実践は、このような教科書における位置づけを反映しているものが多い。特に、生活体験との関わりから作品を読ませ、感想文を書かせること(生活を見直しさせる)や、読書習慣へのきっかけを中心にした実践報告が多い。例えば、渡辺本爾氏(注1)は「くるみ割り」に描かれた家庭像の学習を通して、生徒各自の家庭を見直すという表現活動へ結びつけている。五十嵐兵治氏、宮田暉朗氏等の報告(注2)も、こうした方向の研究の代表的な例といえよう。

衣山満子氏の実践(注3)は、生徒の現実生活と文章表現(描写の読み)を絶えず結びつけて指導している点に特色があり、特に、少年の成長過程での「父への反抗意識」という点に注目させている点は興味深い。

額縁形式ということができる『現在一回想一現在』という作品構成のバリエーションと効果に着目し、論じたものには須田実氏の考察(注4)がある。また、永井龍男の初期の短編「黒い御飯」(19歳の時の作品)を通して、「視点、特に複合視点の読みとり方」を指導した実践に児玉三郎氏のものがある(注5)。

大木真智子氏の教材研究は、「くるみ割り」の小説としての特性をよく把握したもので、「描写の重要性や人物像の変革」という「近代小説」としての観点から、少年の心の成長を読みとらせようとしている(注6)。橋本暢夫氏は、「開眼に至る少年と家族との心の触れ合い」を中心として指導している(注7)。

大内善一氏は、「生徒からの疑問としてくるみが割れたこと」がなぜ「少年の決心」と結びつくのかということがよく出される」点を考慮し、「く視点」という立場から「中心場面」に表現されている意味を解説(注8)させている。くるみを割れたことが、少年の成長(決意と発言)と結びついているという象徴性の理解は、中学二年生には少し難しい点であることは(指導不可能とかの意味ではなく)、高橋俊三氏(注9)の実践における問題点とも共通する点である。

高橋氏は、生徒の初発の感想について、「①作品の構成、または展開に言及している生徒の人数およびそれぞれの感想の質、②絵かき(大人になった「ぼく」)がくるみを割るときの心情に言及している生徒の人数およびそれぞれの感想の質」について、「二つを(①と②)合わせて各学級10人前後もいれば、学習は円滑に進められると期待したが、実際は各学級とも数名に過ぎなかった」と述べている。すなわち、生徒の感想は「ぼく」の子どもの頃の心理、姉・父とのかかわり等の回想部分に集中していたというのである。高橋氏はこの後、「トロッコ」(芥川龍之介)の梗概を話し、現在一回想一現在という構成の効果に気づかせている。

初読後、構成の効果や象徴性に中学二年生が気づきにくいという点は、彼等がそういう読み方に習熟していないことも理由であろうが、何よりもストーリー展開の面白さや身近に感じられるにちがいない主人公の心の葛藤と成長等に目がゆくということ、そういう点に引きつけられていることを如実に示している。切実な印象・感銘・共感というような小説を読む楽しさを通してのみ、細部の描写や構成の与える効果等が『意識化』されるのであって、逆ではあり得ないことは前にもふれたことである。

「作品の組み立てや展開(回想形成など)に注意させる学習指導は、結果を急いでではない。作品の内容理解を経ずに強行すると、単なる形式の理解にとどまり、生徒の共感とはほど遠いものになってしまう」(注10)といえよう。すなわち、あれもこれもと学習の観点(読む技術)を指導する前に、生徒が小説を読む楽しさを実感するような内容と表現をもった作品を多く読ませることが第一であり、そのきっかけを教室でつくる必要がある。さらに、表現(文学であれば、例えば、表現の二重性という特性)の学習を通して、ことばによって現実をとらえる(=現実の見方を知る)という観点到立ち、効果的な技法としての構成や細部の表現に気づかせてゆくことが重要になるであろう。

注1. 渡辺本爾「系統・関連指導の一試み」『実践国語研究30』(明治図書1983年3月)

- 注2. 五十嵐兵治「書く活動を大事にする読みの指導」『実践国語研究 別冊4』（明治図書1985年8月）。宮田暉朗「国語学習と読書を結ぶ授業」『月刊国語教育研究128』（日本国語教育学会1983年1月）
- 注3. 衣山満子「表現を通して心情を読み深める指導」『中学国語6』（明治図書1985年2月）
- 注4. 須田実『文学の授業と発問』（明治図書1984年9月）
- 注5. 児玉三朗「『黒い御飯』の授業」『文芸の授業 — 中学1・2年 —』（明治図書1980年9月）
- 注6. 大木真智子「くるみ割り」『読み方授業のための教材分析・中学校（渋谷・市毛編著）』（明治図書1983年4月）
- 注7. 橋本暢夫「『心の触れ合い』を取り上げた作品の指導研究」『最新中学校国語科指導法講座4（多田・小林編著）』（明治図書1983年10月）
- 注8. 大内善一「『中心場面』の意味を表現構造から解読する指導」『実践国語研究46』（明治図書1984年7月）
- 注9. 「理解領域における評価を生かした授業」『国語科学習状況の評価指導事例 2年』（明治図書1982年9月）
- 注10. 注9に同じ。

その他、鳩貝久延「永井龍男『くるみ割り』」『中学校国語科教育の理論と実践 第4巻』（有精堂1981年2月）、佐々木郁朗「くるみ割り」『中学実践事例集 国語2年』（第一法規1981年4月）等の研究がある。

二、「くるみ割り」の構造と分析

(1)少年の変容と父の「イメージ」

「くるみ割り」の構造と表現については、三章でも述べたが、ここでは、作品の骨格となっている点について考える。すなわち、主人公「ぼく」の成長は、家族との関係（父性との対立と和解、母性からの自立）で描かれており、少年の成長の過程が、実は父の見え方の変化という形で（内部に姉からの自立という要素を含みつつ）表現されているという点についてである。少年の中での父

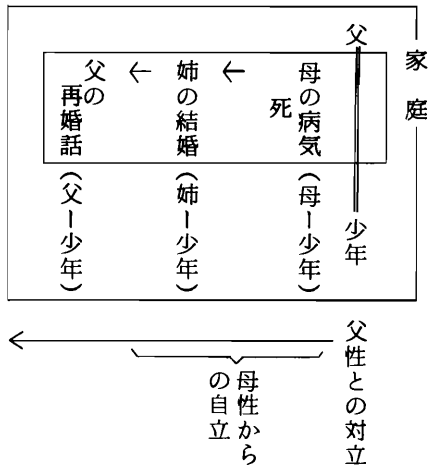
の「イメージ」の変化のプロセスが、少年の成長（変容）のプロセスなのである。その変容を支える重要な要素が、母性との一体感であり、母性からの自立という点である。

すなわち、「くるみ割り」は家族に愛されわがままに育った自己中心的な思春期頃の少年が、最も信頼する母性的な存在の死・別離（母の病死、姉の結婚）という人生の試練をのりこえて、自我未分化の幼稚な心性を脱し、他者の幸福（姉の結婚、父の再婚）を進んで考え、しかも、そうした環境をつくることを行為（発言）としても示すことができるようになったという心の記録である。

父も母も姉も桂さんも、現在となってはすでに故人となっているが、「その昔をしみじみとなつかしむ」のは「父の命日」であって、母や姉のそれではない。父の当時の心境や愛情を慕いながら父のまねをしてくるみ割り、ブランデー、そして、回想話の中で時々、現在に立ちかえり、今の絵書きの心の中の父の存在が語られてゆく表現等は、小説に興行きとしみじみとした空間性を与えている。「父の命日」やくるみ割りは、無論、母や姉への追慕と一体化したものであるが、基本的な構図として、父と子の対立と和解、母・姉との一体感と自立という要素によって少年の成長が描かれているといえよう。

このようにみることができれば、少年にとっての父の存在の「見えかた（イメージ）」が静かな緊張をもって、しかし、劇的に変わる部分（「父の顔が老けて見えた」）前後が、この小説の核心（クライマックス）であり、ここに至るまでの数段階の少年の心理的成長のたゆたいや姉との関係（父の存在、母・姉のあり方）の表現を読むことが、一つの方法としてこの小説を読むことになるであろう。クライマックスの部分以外では、父の存在は全て行動描写か姉の言葉を通してしか示されないが（父に心理的距離を置いた少年の心理をうまく描いているし、男親の家庭での姿一心中思っていることばではあまり表さない—がよく出ている）、クライマックスでは、会話を通して前面に表われてくる。このことも、この小説の構成の特色をよく示していると思われる。

図で示すと次のようになる。



以下、父と子の対立関係を軸に、この小説の展開・表現等について述べてゆく(1～7)。

1. 戦争中にもかかわらず、一見酒落た画家の暮しぶり(紅葉・ブランデー・くるみ等。「食後のくるみとは、相変わらずしゃれたもんだ。’)のイメージは、実は自分を愛してくれた母・姉・桂さん等への追慕の情のあらわれであり、父の面影への敬慕を示していることがわかる。「おやじの命日」情愛や仕草の模倣、懐古。小説の枠組みとして、大きく父の行為・面影が示される。

2. 「父の情愛」の理解と父への反発

妻(少年の母)への情愛の深さは、「情愛を心の奥に秘めて、慎重に看護にあたり、自分の体は病人のために犠牲にした父の献身は、ぼくが成人するにつれて胸に響いた。」と後年回想される表現が途中にはさまれることで、父と絵書きの心のつながりが強調される。また、病人である母との接触を制限されたため、「わがままいっぱい育てた子供心に、そのわがまを封じられた不満もあって、そんな陰口が父をうとんじさせることもあった」という形で不満が残っている。

病気(結核)の伝染性を顧慮した父の行動は、つまらない陰口など全く意に介さないきびきびした、決然たるものとして表現されている(病気の性質を……制限するかわり、……没頭した。……遠ざけ、……呼び戻して、……仕せたりした。)

3. 父の判断と遠足、書斎のくるみ割り

母の危篤状態を考えた父の判断によって、楽しみにしていた日光への遠足に行かせてもらえない

可能性を姉の言葉を通して伝えられる。

「節ちゃん、お父様がね。」と言う。「あさっての遠足ね、このぶんどとやめてもらうかもしれないって、おっしゃってよ。」

泣き顔をみられるのがいやさに、偶然、父の書斎に入り、いらいらした気持ちのまま、くるみ割りでくるみを割ろうとしたが割ることができず、たまたま、皿を割ってしまう。くるみを割れない非力さはそのまま少年の心の狭さ、かたくなさの表現であり、後の「カチンと、快い音がして、くるみは二つにきれいに割れ」る伏線にもなっている。

しかし、また、父の模倣と父への抵抗という要素も見のがすことはできない。「いつも父の座る大ぶりないす」「どすと、そのいすへ身を投げ込む」という表現は、「小柄で、きゃしゃな自分」のいらいらした気持ち、乱暴なすわり方を示しながら、父に及ばない自分、大人への無力感をよみとることもできるだろう。

4. 遠足での反省と土産

遠足へ行くことができたことの安らぎは、「ぼくの生涯の最初のもの(反省)」をうながす。そして、自分の反省と家族への愛情をこめて、母と姉へ土産を買ってくる。焼き絵の糸巻きを大切に使う姉についての表現は、きわめて優れた「ぼく」の心理描写になっている。少年の土産の心を大事にする心づかいや、「たっぷり巻いた、紅や鬱金の糸の色」という鮮やかな色彩感と量感の表現は、少年の姉への愛情の美しさを効果的に示すとともに、姉の女らしい若々しさを描いているとよむことができる。「ぼくはいつまでも忘れないだろう。」という決意をこめた積極的な言い方にも、「反省」の重大さ、姉・母への愛情を忘れまいという思いの深さ(絵書きらしい感受性も)が感じとれる。

しかし、父へのわだかまりがまだ抜けていないことは、次の場面でも描かれている。自分の反省のあと、他者への愛情を自覚するが、対象は母であり、姉であって、父ではない。父への土産の表現がないことは、母や姉との少年の一体感をきわだたせており、父との心理的距離は後の場面への伏線となっている。父の存在は、まだまだ巨大な存在として立ちはだかっているかのようである。

5. 夜ふけの父とぼく

父へのわだかまりは、皿を割ったことについて父が一言も言わないだけに、よけいに「具合が悪い」。この感情は、成長の一つのステップであるが、素直になれないかたくなな心の象徴のように、くるみは「ぼくには永久に割ることのできない堅さ」に思われる。父との心の間に、少年にとって、何か埋められない深い距離を感じてしまうのである。今、紅茶を自分で入れ、ブランデーで体を温めるのは、絵書きが「実はそのころの父のまねをしてみているのだ」と現在と過去が重ねて語られる時、まさに、父と絵書きは重なってくる。父のその時の思いを想像しているのである。

6. 姉との別離（母性的なものからの自立）

大枠では、父—子の対立の構図は変わらないが、その内部で（過程で）母親がわりの優しい姉からの自立（姉の結婚という形での別離）によって、まだ残っている幼児的心性からの脱皮を迫られてくる。父との関係をたて軸とすれば、姉との関係は少年の心を織りなす横軸である。母や桂さんの断片的描写にくらべて、姉の女性的な優しさ、あたたかさは際立っている。

母の病氣と死が少年にとって最初の試練とすれば、姉の結婚の話は第二の試練である。4でみたように、自分のわがままの自覚は、愛されている喜びの実感（母や姉の愛情を知り、喜ぶ気持ち、母性的愛情への一体感）をもたらし、愛される側から愛する側へ、他者の幸福を喜ぶことの幸福へのきっかけとなってくる。

しかし、まだ、2・3のステップが必要である。「自分の姉でしかなかった姉」を、一人の女性として、妻になるべき若い女性として「まぶしく」意識する。しかし、姉の結婚を喜びながらも「悲しさに似た感情」、別離の、そして、「父と共々この家に取り残される寂しさ」を激しく感ずる。このあたりは、思春期の少年の姉（年上の女性であり、母親がわりの人）に対する微妙な心理を巧みに表わしている。

姉の発意による父の桂さんとの再婚話を告げられても「自分をかわいがってくれる人は行ってしまっても、お体裁に、代わりの人を置いてゆこうとしている。」と、父と姉から疎外感を感じてしまう。

母親の一周忌が近づき、姉の結婚が間近になる。「晴れやかな姉の笑い声」に「たった一人の姉を奪われる感じを、最も激しく味わう。」

「姉弟なんて、つまらないもんだね。」という背のびした言い方の中にも、少年の心の成長の足どりが読みとれる。「あれ以来、ひょいっと、桂さんのことを思い出す」ことも、そうであり、桂さんのイメージが素直である点も、自他未分化の幼稚な段階から脱して、自分の内面の個性を知り、同時に、他者の思いをも認識できるようになってきたことを示している。

7. 父の愛情と孤独 — 少年のことば

父の描写は、行動描写（母の看護、書斎でのくろみ割り等）や、姉・少年の心理描写の中に登場するが、あくまでも影のような存在として、大きな家庭の支えとして描かれてきた（これは、少年にとっての『見え方』であるが、同時に、家庭では心の中で思っている、あまり言葉には出さず、いざという時とか、行動によって示してゆく男親の姿をよく示している。一方、姉の愛情の示しかたや情感とは対比的で、効果的である）。

しかし、母の一周忌の前夜の家族（父・姉・ぼく）水いらずの団欒の場面では、父の会話を通して、父の心情や孤独、姉や少年への愛情等が一気にクローズアップされて描かれる。父と少年の心理的緊張の関係が、ここに至って、静かに、しかし、劇的に変化する場面である。それは、少年にとっての父のイメージの変化という形で、少年の内的成長が描かれるのである。

一年なんて、たっつてしまえば早いもんだ。——お父さんも、もう旅行をしなくても済むように、会社へ頼んできた。これで、お姉さんが嫁に行くのと、また当分、ちょっと寂しいな。と、「父が、優しくぼくに言った。」（傍線佐藤）のである。その時、

父の顔が、老けて見えた。

母への追慕の情を仕事に粉らせてきた父が、自分一人のために生活を犠牲にしようとしていることを知った時、父の心労と孤独を痛感する。「しかし、すぐまた慣れるさ。」と父は続けるが、それは少年と姉への思いやりであり、自分に言い聞かせているのである。少年は愛される幸福を知り、

今度は、愛する人の心の痛みを感じとれるようになった。父の孤独と寂しさを感じた心は、これまでのわだかまりを解かし、客観的な姿として父をみる事ができたのである。

父が「老けて」見えたことと桂さんの面影が「どうしたはずみか」目に浮かび、「ちょっと慌て」「困って」しまうことが結びつけて描かれているのは、大変効果的である。自分が未知の目前の問題にとりくみ、真剣に毎日を生きて、必死である時、自分の深層心理やイメージを一つ一つ解析して説明などできはしないだろう。「ちょっと慌てた。そして困って」の部分は、突然に意識化されたイメージ（父のために必要なこと、桂さんの存在）であり、少年自身の心理にそったもので、リアリティを感じさせる。

だれかの理解のなかに自分がいる。だれかの支えのなかに自分がいる。そうした思いを抱きえたときに、少年にはじめて救いが来る。少年の持っている問題を当の少年とまったくおなじ重みをもって感じ取っている人がいる。少年はそうした思いにいたく励まされるのである。

（斎藤茂男編著『父よ母よ（上）』太郎次郎社1979年8月、124ページ）

中学生・高校生が、自分の孤独や不安に耐えて立ちあがるのは圧迫や支配・叱責によってではない。なぐさめや親身な心配（甘やかしではなく）によって、そういう「問題」の共有によってこそ励まされ、彼等自身で立ちあがるのである。

節雄少年に対する父の愛情を、父の孤独やつらさとともにうけとれた少年は、今、自分が何をすればよいかを理解し、言葉に出して表現する。とりわけ、

ぼく、桂さんにうちに来てもらいたいんだけど……。

と、自分の希望として表現するところに少年の成長が示されている。末尾の文章、

— というわけさ。

もちろん、桂さんは第二の母として、亡い母以上にぼくを愛してくれた。

もう父も桂さんも、この世にはいないが、父の命日には、こうしてくるみを割ることにしているのだ。

なるほど、絵かきは、カチンと、巧みにくるみを割り、その音をしみじみなつかしむ。

わたしの割る音とは、どうしても違うのだ。

くるみを割る仕草や、その音が回想の象徴として、しみじみとした情感と空間を創っている。

ところで、以上みてきたように、前半みえなかったものが、後半（特にクライマックスで）鮮やかに浮かび出てくるという描き方は、短編小説に限らないが、とりわけ、短編小説を効果的に組み立てる際の重要な技法の一つである。無論、題材の選択や、ストーリーの展開（構成）、細部の描写と緊密に関係するわけであるが。みえないものとは、人間像（の変化）であったり、人間関係、男と女の関係等の逆転であったり、様々である。永井龍男には、こうした技法を効果的に用いて、男と女の間の不気味な深淵（「青電車」）や、人間の善意と生きる哀しさ（「マッチ」「冬の日」）あるいは、幸福と不幸の逆転、狂気・死による人生の豊かさや現実性の発見（「朝露」「一個」「青梅雨」「私の眼」）等を描いている。

次に、「くるみ割り」の表現の特色を、文体のリズムという観点から考えてみたい。

(2) 文体のリズム

永井龍男の小説の特色の一つとして、暗示的象徴的表現、感覚的表現（色彩・音・動き等）が人物の心理や葛藤を鮮明に、描き出し、作品全体の雰囲気やシンボリックに形成している点があげられる。俳人としての修業による感性や現実認識・季節感覚の影響の他に、「小林秀雄らとの付き合いから知ったフランス象徴派につながる文学理論（略）物質と言語の間に対応を求める諸精神」（注1）もあったと考えられる。

また、短編ながら、人生の断面や現実の不気味さ、人間の善意の姿、生きる哀しさ等の鋭く深い表現は、現実の洞察力の深さとともに、重層的なイメージの構成、文体のリズムによるところが多いのではないかと考えられる。「密柑」「青電車」「冬の日」「朝霧」等いづれも、上に示した細部の表現やシンボリックな統一感はずぐれたものであるが、同時に、類似したイメージの流れや対比的なイメージのくり返しによって、作品世界の重層

性、人間の心理的奥行き等を表現しているということができそうである。(注2)

代表作の一つ、「密柑」(1958年2月、別冊文芸春秋)を例にその要点を次に示す。

45歳の「私」は、再婚の話がきている30歳の恋人と別れるため、最後の一夜を箱根のホテルで過ごす。翌朝、「私」は「女が細い手袋の指を、一本一本しごくように、念入りにはめている横顔」を見て、「なにか切なさのようなもの」を感じる。タクシーで箱根から鎌倉へ帰る途中、運転手によって、黒人将校を乗せたエピソードが語られる。大磯から鎌倉へ向かう舗装道路を走っていると、途方もない数の密柑が散乱しているのに出会い、「私」は拾うのを手伝う。オート三輪車が「覆ったのであった。冷たい風の中に「女」を立ててみたいと「私」は思うが、「女」は車から出ない。「私」は、風の来る海に向かって立ちながら、夕方の「女」からの電話には出ないつもりになっている。

対比的イメージの重層性という点からみると、第一に、黒人将校の愛と「私」と「女」の愛の対比がある。黒人将校の愛とは、東京の「オンリーさん」のところへ、名古屋からタクシーを10時間とぼして、夜、駆けつける情熱であり、渇きである(「名古屋から、一言も口を利かずに、一心不乱で駆けつけた」)。このエピソードは、社会の契約や結婚制度にかかわらず、男がその女を必要とするならば、「あいびき」は続くものであるということを示している。

一方、「私」と「女」が別れる理由は、社会の契約や制度であり、「私」のエゴイズムである。「私」には三年来病床の妻と年頃の長男がいて、会社でも地位がありそうな中年なのである。「愛情を感じるからこそ、終りを清潔にしたい」という思いがある。

はじめから結婚等は成立しえないだろう黒人将校と「オンリーさん」の関係、出会いのために、黒人将校はタクシーを走らせる。「オンリーさん」を思う将校を乗せたタクシー。「黒い巨漢を乗せて、闇夜を疾走し続ける一台の自動車が、怪奇な獣のように想像されてきた。」。

それに対して、別れに向かって走る「私」と「

女」の関係。「烈風の中に、雪を着た明るい富士がそびえている。それを背に、海岸沿いの舗装道路を私達の車は走り続けた。」。

第二の点は、上に述べたそれぞれの愛を乗せて走るタクシーのイメージの対比である。

第三には、明と暗の対比。「私」と「女」の場面が、明るい光の中で描かれ(夜→朝・光へ)、明るさの中の「切なさ」が表現されているのに対し、黒人将校の場合には闇夜の中の、一言も口を利かない「切なさ」と読むことができる。

散乱した密柑の鮮明さは、黒・白(雪)・光等々様々なイメージとの対比や心理のシンボリックな表現ということができるが、ここでは次のようにみておきたい。別れるということ話し合うことによって、二人の中であらためて確かめられた、ひび割れた関係、つまり、こわれた秩序の象徴なのである。「皮のやや厚めな、如何にも春の密柑らしいふっくりした手触り」砂の上の「艶々と光る密柑」「ただ鮮やかな色彩」という表現は、男と女の別離の生々しさを、叙情的な緊迫した瞬間として定着させている。

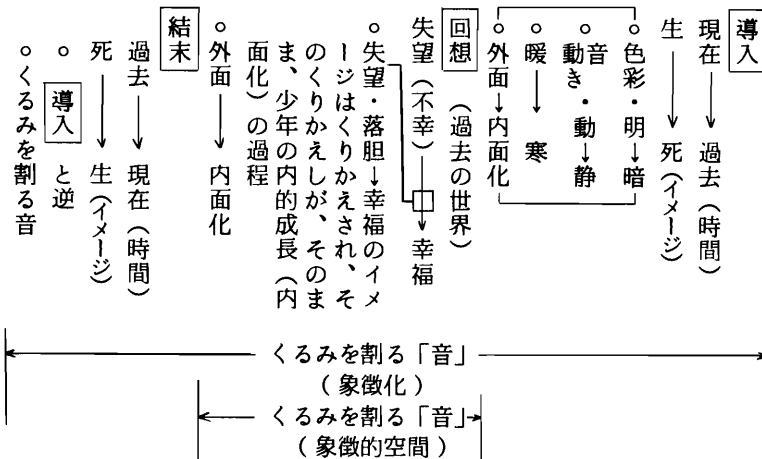
さて、「くるみ割り」では、どのようなイメージのリズムがみられるのか。緊密な構成による安定した印象、しみじみとした情感の形成、そして、次のようなイメージの重層性・リズムがみられるのである。

導入・回想・結末と大きく三つの場面に分けて考えると、下図のようにまとめられる。

導入部分と回想部分の照応の意味、つまり、額縁効果については、回想部分の静かで落ちついた雰囲気・情感を高める、あるいは、しばしば比較される「少年の日の思い出」(ヘッセ)のように、少年時代の思い出の1コマを数十年たっても覚えており、忘れられない思い出として覚えておこうとする大人の胸中の話として語ることで、話(告白)に奥行きと重厚さを与える点があげられる。その他、次のような点(①～⑤)も指摘することができる。

①野球の緊迫した場面から小説を書きはじめ、読者の興味をひきつける。

②回想部分への自然な展開のために、動から静へと、次のような経過で読者の心の準備をはかっ



ている。緊迫した空気→試合後の解放感→絵かき
の家でのくつろぎ。

③紅茶・ブランデー・くるみの提示。落ちついた、
静かなムードの中で「わたしたち」（読者）の関心をくるみに集めようとしている。

④色彩の印象・音の効果。現実の場面が感覚的
で華やかな（カラフル）表現が多いのに対し、回想の場面は淡々とした調子で語られる静かな落ち
ついた場面である。いわば、カラー写真の世界と
モノクロ写真の世界との対比で相互に照応して鮮
明なコントラストをなしている。

⑤回想部分で唯一、鮮やかな色彩感の場面は「
生涯で最初の反省」をした遠足の土産である糸巻
きに姉が紅や薔金の糸をたっぷり巻いたという
部分である。思春期を迎えた少年の微妙な心理を
反映している（姉への追慕や思い出の投影の鮮明
さ）。（①～⑤は、『国語二』光村図書「指導
書」183～184ページ）。

この導入場面は、人生の深い情感が語られる回
想の場面への“舞台設定”として、まことに効果
的に描かれている。色彩や音について、④の指摘
につけ加えるとすれば次のようになる。色彩の印
象（視覚）は明 → 暗へ、音や動き（聴覚・視覚）
の効果は動 → 静へ、気温（大気・触感）は暖 →
寒へと、また、夕方の空を背景とした球場から
家の中へ、視線は外 → 内へと移りかわっている。

しかし、ここで特に着目したいのは次の三点で
ある。

(1)今まで述べてきた要素を含みながら、時間的

には、現在 → 過去へさかのぼる表現がなされて
いること。すなわち、「わたしと友人」は「絵を
かく友達の家」に招かれていて → 絵かきとは中
学以来の仲間である → 絵かきの近所の大きなけ
やきの木を「わたしはなつかしくけやきを見上げ
た」と語られる。現在 → 過去へという時間の流
れは、生 → 死へというイメージの変化と重なり
合っている。

(2)生 → 死へ。冒頭の六大学野球のイメージは、
動的な青春の生き生きしたイメージである。その
イメージは、絵かきと奥さんの仲のよい家庭的雰
囲気、生活と重なりつつ、「今日はおやじの命日
でね」と突然、死のイメージが提出される。くる
みと命日……読者への興味をもたせながら。また、
野球のさわやかなイメージは、少年の成長のイメ
ージとも重なっている。

(3)(1)と(2)のイメージの変化は、表面的一般的イ
メージから、個別的内面的なイメージへの変化と
も重なっている。常識的で一般的な場面や人間の
表現から、しだいに、個別な、その人間の内面的
な問題に光があてられ描かれてゆくという変化で
ある（(2)少年の変容と父の「イメージ」でふれた
点とも重なる）。

(1)(2)(3)の要素は、回想場面、結末場面でもほ
同様にくりかえされ、この小説にリズムをつくり
出している。結末の部分は、過去 → 現在、死 →
生のイメージへと、いわば日常性への復帰が語ら
れて、導入と対応している。

回想の場面は、失望（落胆・不幸）→幸福とい

うイメージの変化がくりかえされ、そのリフレインがそのまま、少年の内的成長（自己中心的で表面的な少年から、精神的に成長した少年へ）の過程となっている。以下、要点を示してゆく。

- 出生、母の病氣、母の笑顔（生）→母の死（死）
- 遠足がいけない不安、母の具合の悪さ、くるみは割れない、皿を割る（不幸）→母の小康、遠足へ行けたよろこび、姉・母への土産（幸福）
- 母の病気の進行、父の看護の苦勞、母の死（不幸）→試験に合格、新しい世界、父の慈愛（幸福）→姉の縁談・婚約、「悲しみに似た感情」、家にとり残される「寂しさ」、父の再婚話（不安）
- 一周忌が近づく、父の再婚話を意識する、姉の結婚準備（不安）→父の愛情を理解、くるみが割れる、父の再婚を申し出る（幸福）

また、くるみを割る音とくるみ割り、回想全体の象徴的表現であるとともに、導入・回想・結末にも一貫している。

注1. 大岡昇平「永井龍男」『大岡昇平全集、第12巻』（中央公論社、1964年）

注2. 拙稿「『野火』の空間性」『言語と文芸—第100号—』（大塚国語国文学会編、1986年12月）参照。

三、高校生の「読み」の実際と考察

何よりも小説の面白さに気づいてもらいたくて、教科書教材とは別に、短編小説をプリントで配ったりしてきた。「くるみ割り」はかつて中学二年生の教材であったが、高校一・二年頃の生徒にこそよい教材になると考え（詳しくは、三章の(1)「くるみ割り」と高校生）、配布した。

高校一年生（男22名、女24名計46名）、千葉県立千葉南高校、1986年6月。

ゆっくり範読し、読み終わったあとは、隣同志自由に感想を話し合わせ、残り時間は感想文のためのメモを作らせた（1時間）。次の1時間は感想文をまとめる時間とし、最も印象に残ったことを1つか2つ、具体例を示しながら述べるよう指示した。ただ、ねらいは、小説の魅力に気づかせ、教科書教材への導入にすることや、読書のきっかけとすることにあるので、感想文も、書くことに

よって自分の考えを深め、確かなものにするように指導も配慮した。（感想文は、次の時間に1時間つかい、私が名前は伏せて、読みあげて紹介した。一年間で1人1編は読むようにしている。必ず良いところを指摘し、欠点はせいぜい言っても一言くらいである。この時間は生徒は、いつもよく聞いている）

以下、1～7は感想文の部分、8～12は全文である。

1. いい話だと思った。何と書いていいかわからないあたにかみがあった。戦時中に、回想としての話だから、かなり昔のことなのに全然、古い感じがしない。これは、すごいと思った。こういう良い物語は、静かな自分の部屋で、机の電気だけで独りで読みたいものだ。
(男子)

2. 「くるみ割り」という題を見た時と、読んだ時のイメージが全然ちがった。「くるみ割り人形」のような夢の世界っぽいと思っていました。
(男子)

3. 作者は、話のもっていき方がうまいと思った。（本当の話だったら違うけど……）
(女子)

孤独や哀しみをどうしても経験しないでは生きてゆくことのできない人間同志を、善意や優しさで互いに結びついてゆくという点においてとらえる人間観は、永井龍男の思想の一側面である。これは「くるみ割り」にもよくあらわれており、1を書いた生徒に「いい話・あたにかみ」という印象を与えている。このような感想は多かった。「静かな自分の部屋で……」の部分、この小説のしみじみした雰囲気にはひたっていることを示しているが、常に行動的で活発、字は乱雑（ノート）というこの生徒の日頃の様子との対照が興味深い。

題名との異和感、現実離れた「小説」としての作為について述べる生徒は2・3の例に限らないが、それほど多くはなかった。ただ、小説を読むという個人的楽しみに、ユーモアや夢想的要素、ロマン等を求めるのは自然なことであり、日頃の読書経験の方向や興味関心が確認できる。また、3のように、話がうますぎるという印象は恵まれ

た家庭環境の中で、主人公があまりにも簡単に人生の苦難をのりこえてしまう点にむけられていることが多いようだ。こういう段階の生徒には小説の方法と人生の姿という点から、フィクションの意味を教えたり、細部の描写に気づかせたりすることができるだろう。

4. 私はこの物語を読みおえた時、何だかとてもすがすがしい気持ちになった。それと同時に物語にはつきものであるハッピーエンドで、喜びと安心感があった。

(女子)

この「喜びと安心感」、読後の「すがすがしさ」を豊かに知るという芸術的な感動は、人生は信じ生きるに価するという生きる意欲につながるだけでなく、人生や人間のミニチュアとしての「論理」(愛情の表し方、父親という存在、試練をのりこえるということ……)を教えてくれるのである。また、ハッピーエンドの構成は『グリム童話』に典型的にみられるように、主人公が途中で苦難や不幸をのりこえる際の血なまぐさい戦い・残酷なイメージを、生きる知恵や勇気・人生の契約・人間の「論理」という点から昇華し、保証するものである。

5. この小説は、量的に少なかったので、とても読みやすく、わかりやすかった。それに中学の時にやった「少年の日の思い出」に似ていて、いっそう入りやすかった。

(男子)

この生徒は、普段国語の授業では発言の少ない控え目な生徒である(数学が得意)。分量的に負担が少ないためにわかりやすかったという指摘はきわめて重要である(わかりやすさの理由には心理描写や題材という点もあるだろう)。この生徒の場合は、ストーリーの展開を把握し、その面白さ(謎とき、ユーモア、勇気と力、冒険等を通しての判断・知恵)を楽しんでいる段階とみることができるだろう。詳細な描写をストーリーとの関係で味わえる程、読み手としては、まだ成熟していない段階である。小説に慣れ親しんでいないわけであるが、高校一年生で、このような感想をもつ例は、決して特殊ではないと私は考える。生徒にとっての「わかりやすさ」を考えながら、体

系的・段階的に指導する必要があるだろう。

6. 自分が子供っぽいのか、それとも大人へと成長しているのかを自己吟味するよい機会であったと思う。大人に成長するとはどういうことかもよく知ることができた。特に、絵書きの子供の頃と姉とを比較してみることで、知ることができた。

(男子)

7. 「くるみ割り」を読んで一番強く感じたことは、父親の家族を思うやさしさ、姉の弟を思う心、節雄の大人へのなりかけの時の気持ちのうつりかわりである。

(男子)

6について。節雄少年の精神的成長のプロセスの理解は、この生徒に、自分の人格的成熟度への検証へむかわせている。このような感想は多く、後に示す9・11の感想にも形をかえて表現されている。「大人」のあり方への模索、少年と姉の人間像の対比がみられる。絵書きの追慕の情は母や桂さんより、姉と父へ強いことがわかるし、そのように描かれている。この感想はそれをとらえたものといえよう。また、「大人」のあり方への模索は、今のこの生徒の関心のあり方や立場をよく示しているものといえよう。

7は、「くるみ割り」の、いわゆる「主題」の構造を的確にとらえた感想の一例である(豊かに鑑賞したかどうかは別にして)。小説の「読み」の抽象化は、「読み」を貧しくし、作品を貧弱なものにするが、自分の「読み」を確かめ、表現することによって、それがきちんと評価されれば、自分の「読み」への自信となり、より多様な読書体験へむかわせるであろう。そうしたなかで個性(的見方も)は育てゆくのである。

8. この物語の中で作者は、精神的に節雄が子供から大人になってゆく過程を、母の死という観点であざやかに描いていると思いました。人生の中でだれもがいつかは通らなければいけないその中で心の変化が手にとるようにわかります。

節雄が遠足のとき、ひそかに自分を反省した時、この時、大人への第一歩をふみ出したのだなあと思いました。

お姉さん、お父さんの節雄のことを第一に考えている姿勢が節雄の幼い意地をやわらげて、他人も思いやれる人間にしたと思います。

言葉できつく言わず、自分の身をもって節雄に悟らせたお父さんは、すばらしい人だと思います。

この物語を勉強して、私は自分自身が節雄のように、精神的に大人になれるようになります。 (女子)

遠足での楽しい場面と反省については共感をよせた感想は多かった。中学時代の遠足や修学旅行という体験と重なり、少年の心理もよく理解できたものと思われる。また、少年の内的成長のきっかけ(一段階)として、遠足と反省の場面は印象的でした。描写にもなっており、この生徒の感想はこの部分についてふれたものの一つである。

「言葉できつく言わず……」の部分は、言葉でなく行動(行為)の中にこそ、本質があるという人生の真実を示しているが、言葉と真意のへだたり、コミュニケーションのむずかしさ等について敏感になって悩むことの多いこの時代の特性をも示しているといえよう。

9. この小説を読んで、最初に思ったことは、家族の大切さと、心のやさしさということだ。父や姉の心づかいは、すばらしいものだと思うし、少年の子供らしく純粋で単純な所にはなんだか心をひかれるような気がしました。

また、少年の心の大きな成長には感心しました。大人になるというのはどういうことか、私はあらためて考えてみました。少年は母を亡くしてしまう不幸にあってしまうのだけれど、とても素直で、いい子だと思う。それは、父や姉などの大きな愛情があったおかげだと思うし、最近、こんなおだやかな人、家族はいるのかなと疑問を感じました。

まだまだ子供の少年は、少しわがままをいって、姉をこまらせたり、父の気持ちを理解できなかった。そんな少年は大きくなるにつれ、母の死などを通して、自分中心でなく、他の人のことも考えられるようになって、がまん強くなってきた。

中学生ぐらいの少年がこんなに立派になって、私は自分をふりかえって、少しはずかしいと思いました。私はまだまだ子供のような態度をとることがあるからです。

(女子)

この生徒は、小学校中学校と先生につねに「模範」生となることを期待されてきた生徒であった(母親談)。しかし、高校に入り、いろいろな場で自分の決意と行動や持続力が要求された時に、潔癖さ故に、理想と今の自分の落差に悩むことが多かった。こうした時期に、家族(特に母)との対立やわがままがしばしばみられた。

上の感想文はそうした状況とあわせて読むと興味深い。8の感想もそうであるが、母の死という点にふれていることの背景には、女性としての生き方や、家庭観等の模索があるだろう。

10. この作品を読んで、家族間にあるべき協力の態勢をあげることができた。

父と姉を中心として、少年時代の絵かきの思春期のむずかしい気持ちをあたたかく見守っている様子がとても印象的であった。

母の一周忌の前夜、親子三人が卓を囲んでいる場面があったが、久しぶりにだというのに、話がはずんでいる。話の様子はぎこちなくとも、言葉一つ一つが相手を思いやり、つつむようである。⁽¹⁾

自分の家では、家族五人(父・母・兄・姉・自分)が、全員家にいる時が多いが、卓を囲んで談笑などというのは、ここ数年みていないのではないかとと思う。一人一人が自分の部屋にまるとかくれるように閉じこもっていて、ドアをしめてしまう。話をしようとしているのではなくて、みんなで話をする機会をつぶしにしているような気がしてならない。⁽³⁾

父は休みの日には、いつも仕事をしているし、兄は受験勉強で忙しい。張りつめた空気をやわらげようと協力をしてくれない。父は元気であるし、白髪染めをつけていても、まだみられる若さだなと思う。

しかし、この作品の最後にあるような、父の愛情を注いだ後のつかれた、しかし、優しい顔を見ることが出来る時はいつになるのだ

ろうと思う。

みんなが笑って、お互いを思いやって生活を実現したい。やはり他人とはいえ、家族なのだ。⁽⁴⁾

だから、あるべきはずの家族の協力の姿をこの作品であじわうことができた。

しかし、また、家族内の自分の未熟さをも知ることができた。これから、家族内での協力を忘れずにいきたい。

(傍線佐藤, 以下同じ) (男子)

率直で、切実な告白である。傍線部(1)の部分は(母の一周忌前夜の場面について)家族間のあたたかいふれあいへのあこがれが、みごと表現されている。家の中で、いつも孤独で寂しさをかかえている自分、つめたい家庭の雰囲気(2)(3)。末っ子で、おとなしく、内にもるタイプの生徒である。とても素直でやさしい。父や兄は自分のことで精一杯(?)、少なくとも、父は「自分」にわかるような愛情の示し方はしていないのであろう。父に対する期待の大きさがよみとれる。

(4)の部分、「他人とはいえ」は、一人一人は色々な人間だがくらいの意味だろうが、この生徒の成長にとって、いかに家庭のあたたかさ、父性との関係(父・兄)が重要かを示している。末尾のことばがけなげである。これから、自分から環境をつくる側に成長しなければならない。

11. この作品は前に一度読んだことがあった。

あれは中2か中3の時……、親との戦いの毎日で、私はいわゆる「反抗期」のまっただ中にいた。⁽¹⁾うちの父は単身赴任で、家には母と兄、弟がいる。母は一人で大変だったのにと今になって自分の子供っぼさを思う。そんな私がこの本に出会ったのは偶然ではないと感じる。

節雄君と私は非常によくにていると思った。子供はけっきょく同じかもしれない。「わがまま」のかたまりみたいなもの。そのかたまりを相手にする親、兄弟は大変である。

この作品の姉と父は、節雄君を一人の人間としてあつかっていると思う。⁽²⁾「節雄がよければ」とか、姉が節雄君に「すまないけど……」と言うところからうかがえる。これを、

「私がきめたんだから従え」ってかんじて父が言えればそれは節雄君を一人前の人間としてみていないのでは……と思う。

しかし、節雄君は父や姉にこたえられるほど一人前の人間になっていない。一人前の人間にみてる父、姉の最高の愛情がわからない。そんな節雄君の父や姉は叱るのではなく、優しく大人になるのを見守っている。⁽³⁾節雄君はその愛がわからず、だだをこねる。

しかし、作品の最後で、彼は一まわり大きくなる。そして今、彼は昔を思い出している。私もほんの前の自分がとてもわがままに感じる。その時、父や母の愛情を感じられなかった。今となっては、もういい思い出が……。

そして、私にも子供ができてその子が大人になる門の前にたてる年令になった時、私はうしろではほえみながら応援してあげたいと思う。それがわがままだった自分がおかした罪ほろぼしになるのではないだろうか。

(女子)

この生徒の感想は、過去(中学校2年か3年)の自分の「反抗期」と家族の姿を(1)、小説の回想部分と同じように「回想」し、現在からその意味を、語っている点のはっきり出ていて興味深い。

(2)の部分以下は、大人として、「一人前」として見てもらいたい、そうならなければならない思いや自分への自信が、うかがわれるところ。

また、(3)は11の男子の感想と対照的に、家族に見守られてきたことの幸福感をよみとることができる。こうした幸福感は、末尾の段落で自分の子供(思春期頃)を「うしろではほえみながら応援してあげたい」という未来への志向・人間観となって表現されている。

12. 私は、このプリントを読んで、わかったことや感動したことが二つあります。

一つは精神的に成長することで、自分の周囲の人を思いやれるやさしさが生まれるということ、つまり、自己客観化の能力をもつことで、周囲の人にやさしくできるといことです。

はじめは、自分のことしか考えられなかった節雄が、自分の周囲の人を信じることで、他人のことまで思いやれるようになりました。最後の節雄のことば、「お父さん、ぼく、桂さんにうちへ来てもらいたいんだけど……。」⁽¹⁾には、父親の心の負担を軽くしてあげたいという節雄の、父に対する思いやりが、ありありと表現されています。

この「来てもらいたい」が、もし、「来てもらってもいい」だったとしたら、⁽²⁾お父さんは喜んで桂さんを迎えることはしにくいのではないかと思います。

こんなちょっとした言葉のちがいで、聞き手にとっては、意味がずいぶんちがってしまうのです。

精神的に成長することで、他人の幸福を考えられるようになることは、とても素晴らしいことだと思います。

もう一つは、家族愛の素晴らしさです。この物語の登場人物は、みんないい人達ばかりです。その中でも特に私が深い愛情を持っているなあと感動したのは、節雄の父と姉です。姉はどんな時も、周囲への気配りを忘れません。わがままだった節雄に対しても、いつもやさしく接してきました。私もこんなやさしい人になりたいと思います。父は自分を犠牲にしてまでも、家庭のことを優先するとともに立派な人です。

例えば、「情愛を心の奥に秘めて、慎重に看護にあたり、自分の体は、病人のために犠牲にした父の献身」とか、父の言葉の「一年なんて、たっつまえば早いもんだ。—お父さんも、もう旅行をしないでも済むように、会社へ頼んできた。」⁽³⁾などというところで、立派な父の姿がよくわかります。

愛する人のためなら……というの口で言うのは簡単でも、実際に態度で示すのは、かなり困難なことだと思います。

最後に私は、「くるみ割り」で学んだことを日常生活に役立てていこうと思います。というのは、具体的にいえば、精神的に成長して他人を思いやれるやさしさを持つようにな

るといことです。決して簡単なことではなけれど一生懸命努力したいと思います。

(女子)

論理的で、しっかりした文章構成の感想文である。特に、引用とその意味づけ、例示と主張の関係が明快であるので、わかりやすい。一般的に、高校一・二年生(中学生)は、作品中の一部を抜き出して、意味づけないと、自分の見方が他人に通じないということがわかっていない。引用すれば不必要にダラダラと長くなったり、逆に、自分はわかっているのに、結論だけ書いて、書くことがない等と言ってしまう。

これは、文脈の中で部分を抜き出し、自分の思考の論理の中で意味づけることが、いかに読解力と、抽象化能力が必要な作業であることを示している。しかし、こうした練習が不足していることより、自己客観化の能力の未発達、すなわち、自分の考えの個別性という点についての意識が十分育てられていないことが大きな原因であることが多い。自分の考えの価値が保証されれば、つまり、内容の価値が評価されれば、安心して、形式(構成や述べかた)を工夫するようになるのである。

そのような観点からみると、(1)(3)の引用と意味づけはよくまとまっており、一段目の結論とむすび合っている。また、(2)のような表現の二重性に気づくことは(ここでは会話)、文学的文章を読む大切な要素であり、今後の学習への発展が期待される。

おわりに

文学作品を読み、感動したり、生きる知恵や勇気を学んだり、あるいは、人生の深さを経験したりするのは結果であり、文学作品から何を学ぶかは、児童生徒の権利といえるだろう。解釈や感動の押しつけは、指導者側の自己満足となりやすいのみならず、文学嫌い、国語の「授業」嫌いをつくることになる。

しかし、文学作品の構造や特性を研究し、児童生徒の「成熟過程」にそった作品を与えることによって、児童生徒たちは、文学作品を読む楽しさを知り、何かを学んでゆく。その時、文学作品の本質に即した指導の観点は、優れた表現や文体等

の文学的表現に気づかせることになり、さらに、現実を言葉でとらえることの意味を実体験することになるのである。

今回、別稿を含めて考察した文学作品の構造と特性、すなわち、「人格形成小説」の要素、「心理描写」の方法、「構成」の方法、「表現の二重性」「文体のリズム」等は、あくまでもその一部である。詩の方法、「イメージ」の本質、「描写」「表現の二重性」「文体」等については、児童生徒の受容傾向とともに、今後の課題である。

また、このような文学的文章の核心である「文学」性の特徴を明らかにしてゆくことは、論理的（説明的）文章のしくみや、指導目標・方法等を考える手がかりになるのである。